

有田地域における陶磁器産業の構造と変容

野 中 亜 紀

佐賀県有田町は山地が町の7割以上を占め、平坦地が少ないが、ここに陶磁器産業が立地し、約400年の歴史と伝統を継承してきた。町の経済は陶磁器製造業・販売業によって支えられており、まさに「やきもののまち」として発展してきた。

有田焼産地は中小零細企業から成るが、これがまず分業の発達をもたらす要因となった。資金・労働力・土地など様々な面で問題を抱え設備の近代化が達成できなかった。このため主要な焼成部門を残して、成形・絵付工程は外注に出すようになった。これらは生地業、絵付業として独立し、さらに生地業は長崎県波佐見町に、絵付業は有田町に集積しており、陶土業の塩田町と合わせて地域的分業の様相を示している。

有田町の陶磁器産業は、生産工程に見られる地域的な関連のほか、労働力の面でも周辺市町と深く関連している。特に農業中心の有田町や山内町からは多くの労働者を吸収している。これらの豊富な労働力が低賃金構造を作り上げ、陶磁器産業を支えてきた要因の一つである。

低賃金構造をもたらしたもう一つの要因は女性労働力と高齢労働力である。これらは都市部への人口流出による人手不足を補う役割を果たしたが、それ以前に陶磁器産業の構造と関連している。つまり絵付作業のように生産工程の中で機械化しにくく労働集約的な部門に、女性労働力の需要が生じたのである。また一旦身につけた技術は高齢になっても活かす続けることが可能である。こうして労働力の女性化、高齢化が進んでいるが、後継者の育成や商品・技術開発など様々な面で問題を生じている。

有田焼の販売ルートとしては従来、産地問屋と

消費地問屋を介するルートが主流であったが、より迅速で効率的な流通が求められるようになってきた。そのため影響力を強めていったのが直売業者である。直売業者は消費者の中でも旅館や料亭を専門に生産者との間を仲介する。また規模の大きいメーカーや陶芸家は販売部門を設けて小売店と直接交渉するところもある。しかし大多数の中小窯元は卸商（産地問屋）を介さざるを得ない。迅速な流通は消費者のニーズをいち早くつかむためにも必要であり、従来のルートも短縮化の方向に進んでいる。

産地の抱える問題は少なくないが、中でも労働力の確保と人材の育成は対策が急がれる。なぜなら優れた人材は新商品、新技術の開発や需要の開拓に欠かせない。需要が多様化・個性化・高級化する中で、消費者ニーズに速く適確に対応する能力が必要とされている。人材育成のための教育機関の充実が求められると同時に、労働環境の改善や生活環境の整備が課題となっている。

また産地振興のためには製造業・販売業はもとより関連産業も含めた体制が必要である。さらに有田町だけでなく周辺市町も一体となった広域的な連帯が望ましい。そのため大有田焼振興協同組合が設立され、陶磁器産業全体、有田焼産地全体の振興が図られている。

一方地域づくりに関しては、陶磁器産業の歴史と伝統をメインにした観光が中心である。特に有田町は産地の中枢として魅力ある町づくりを目指している。今後、先端技術産業であるファインセラミックスの本格的な導入も期待されており、伝統工芸品から先端技術まで幅広い分野にわたる陶磁器産地として今後の発展が期待される。